

資 料 編

全国陸上競技愛好会会報

陸上の友



福島国体観戦合宿 飯坂温泉「いいざか」にて

No. 397

1995. 11. 1 発行



編集者：後藤哲也（昭和44年卒）氏が，本会報に一橋大学の対抗戦
を中心に特別寄稿されたものを引用転載させて頂いた。

陸上競技 データレポート

埋もれてる大会 ⑩

神奈川 太田 重男

一橋大学の対校戦

本号には、一橋大学の対校戦を中心（一橋大学陸上部のご紹介も兼ねて）に、同大学OBの後藤哲也氏にお願いしました。後藤氏は、都立戸山高校→一橋大学卒で、高校時代は卓球を、大学進学後陸上競技を本格的に始められ、同大在学中は長距離ランナーとして、又マネージャーとしてご活躍された方です。

◆特別寄稿

後藤 哲也

読者の理解を助ける意味で、始めに一橋大学および同陸上競技部の創設時期を記す。

一橋大学は商法講習所として明治8年（1875年）に渋沢栄一等により設立され、今年9月に120周年を迎えた。明治35年に東京高等商業学校、大正9年に東京商科大学と名称が変わったが、場所は都心の神田一つ橋にあった。関東大震災で、昭和2年～4年に中央線沿線の現在の国立市に移った。陸上競技部は関東大震災の年の大正12年（1923年）の創部で、70数年の歴史がある。

1. 一橋大学陸上競技部の対校戦

インカレや国公立戦等のいわゆる大会を除けば、対校戦は現在では4つある。

ルーツの古い順に記せば、①旧三商大戦（神戸大・大阪市立大・一橋大）、②四大学戦（東京外語大、成蹊大、学習院大、一橋大）、③東大戦、④名古屋大戦である。

以下、順に記す。

① 旧三商大戦（神戸大学・大阪市立大学・一橋大学）

大正13年（1924年10/31）に早稲田実業グラウンドで行われた第1回神戸商大VS東京商大戦が発祥。この時は28対24で神戸が勝利。以後、神戸商大との対校戦は昭和12年まで14回続く。対戦成績は東京商大の8勝6敗。（前半は神戸、後半は東京が強い。）特に昭和10年の試合は全日本インカレ走高跳1m90の橋川雄一選手等を有する東京商大が50.5対6.5で圧勝している。その後も当時の鉄人、木原正義選手等の活躍で東京商大の圧勝が続いた。因みに木原選手は、100m11秒1、200m22秒9、走高跳1m85、走幅跳6m66、三段跳14m12、砲丸投11m30、円盤投33m10、槍投50m12の記録を持つ、昭和12年当時としてはかなりのレベルのオールラウンドプレイヤーであった。

その間、大阪商大も交えての対校戦が企画されたが、神戸が大阪の参加に賛同しなかったため、実現の運びには至らず、昭和4年（1929年）に取り敢えず変則型で試行。

まず、（7/7）大阪商大25.5：東京商大31.5、（7/21）神戸商大23：東京商大34。翌昭和5年には一步進めて、リーグ戦方式で実施。（6/28）大阪商大32.5：神戸商大24.5、（7/18）神戸商大25.5：東京商大31.5、（7/20）大阪商大27：東京商大30。従って順位は東京、大阪、神戸の順となろうが、もし神戸が東京に勝っていたら、話はややこしくなるところ？（相撲の巴戦か）

その後、大阪商大も交えた対校戦は沙汰止みとなっていたが、昭和13年（1938年7/10）に東京商大・国立グランド^{くにたち}で、正式の第1回三商大戦が実現した。その時の戦績は大阪29、東京26、神戸3。しかし、折角実現した三商大戦も戦争のため、昭和17年（第5回）までで中断。東京商大の戦績は1位3回、2位2回。

戦後、昭和23年7月に復活第1回を東京商大・国立グランドで実施。大学制度の改定に伴う最後の三商大戦は昭和25（7/21）に東京商大・国立グランドで実施（戦後復活第3回）。その時の最後の三商大戦の成績は、東京商54.5、神戸商大29.5、大阪商大22。戦後3回の戦績はいずれも東京商大が優勝している。

当時は大学制度が大改定中で、純粋の商科大学の流れを汲む大学として3校共に存続し続け得るのか不鮮明な時代背景の下、三商大戦のルーツである神戸／東京の対校戦は残すべく、同じ昭和25年（7/30）に兵庫県明石市の県営陸上競技場で神戸／東京の2校による対校戦が行われ、東京が勝利している。まだ食糧難の時代で苦勞の多い試合であったと聞く。

参考までに記すと、大学制度の改定で昭和24年に東京商科大学は一橋大学になったが、移行期間中の数年間は東京商科大学も並存しており、最後の東京商科大学卒業生は昭和28年である。

なお、記述が前後するが、戦前の貴重な大会として、昭和7年発足の全国高商大会がある。現存する試合ではないので、歴史の中に埋もれてしまう心配があり、この誌面をお借りして記録しておきたい。

この大会は、東京商大・陸上競技部の呼びかけ・主催で実現した全国の商科大学（専門部）および高等商業学校の陸上競技大会である。

当時の東京商大・陸上競技部の尾本信平主

将(昭和8年卒 元三井金属鉱業社長 現名誉相談役/現一橋陸上競技倶楽部会長)達の、実現に向けての気迫と行動力は特筆に値する。

まず文部省と掛け合い当時の金額で200円の運営予算を獲得。また東京商大・国立グラウンドを公認トラックに改修すべく大学側と交渉し、大学の施設予算で競技場や用具の全面的更新を実現させている。公認トラックに関するエピソードとして、面白い裏話があるので、ご紹介しておきたい。トラックの改修工事が終り、1周の長さを測量してもらったところ400mに僅かに足りない。長い分にはいいとしても、短いと絶対に公認されない。当時は鋼鉄製の巻尺で測量しており、気温が高いと伸びて誤差が出るがあった。そこで、今度は雨の日に再測量してもらったら、寸分違わず400m丁度であり、晴れて(雨だったが)公認された由。運営面でも工夫し、予算不足から表彰式での校歌吹奏用の軍楽隊を手配出来ず、代りに参加各校の校歌を東京商大・音楽部の協力を得て事前に録音。勿論、当時はテープレコーダーのような便利なものは無いから、レコード盤を作成。作成費用は企業訪問で資金集めをして捻出した。

こうした関係者の尽力の結果、昭和7年5月12日、豪雨の中、時の鳩山文部大臣の隣席を得て、国立の東京商大・兼松講堂にて(大雨でグラウンド使用出来ず急遽屋内に変更)、準備委員会の発会式が挙行された。

そして、記念すべき第1回大会は昭和7年7月16日～17日に国立の東京商大グラウンドで実施された。優勝は名古屋高商で、東京商大(専門部)は9位であった。この大会は昭和17年の第11回大会まで続いたが、残念ながら戦火のため中止となった。因みに、最後の大会には19校、239名が参加した。なお、開催場所は東日本の国立東京商大グラウンドと西日本の甲子園グラウンドを交互に使用。西日本開催時は神戸商大が幹事校を引き受けた。

さて、話を『三商大戦』に戻す。戦後の新制大学制度発足に伴い、神戸商大は神戸大学に、大阪商大は大阪市立大学に、東京商大は一橋大学に、それぞれ名称が変わった訳であるが、新制大学後の第1回の新制三大学の対校戦は昭和26年に『旧三商大戦』の名称で行われた。以降、毎年7月上旬に『旧三商大戦』が3校の幹事持ち回りで開催されてきている。

以上を図式化すると次の通り。

(大正13年)

神戸商大/東京商大
}

(昭和4年)

神戸商大/東京商大
大阪商大/東京商大

(昭和5年)

神戸商大/東京商大
大阪商大/東京商大
大阪商大/神戸商大
}

(昭和12年)

神戸商大/東京商大

(昭和13年)

三商大戦
}

(昭和17年)

三商大戦
(中 断)

(昭和23年)

三商大戦
}

(昭和25年)

三商大戦
神戸商大/東京商大

(昭和26年)

旧三商大戦
}

新制大学となってからの対戦成績は、神戸大学が概ね優勢である。(総合大学として理

科系学部もあり、学生数も関係か。特に医学部に強い選手がいると6年間に在籍するので脅威。) 神戸大学陸上競技部は現在関西インカレ1部校として活躍している。

大阪市立大学陸上競技部も優秀な選手を輩出してきた少数精鋭のチームである。一橋大学陸上競技部にとって、『旧三商大戦』は歴史的に観ても、最大の対校戦であると言える。

この『旧三商大戦』は開催時期が梅雨時のため、大雨にまつわるエピソードには事欠かない。私が体験したケースでは、昭和42年の神戸王子競技場での豪雨試合後、懇親会場に予定されていた神戸大学学生食堂が、土砂崩れで料理諸共に損壊。乗っていた電車は途中で動かなくなり降ろされ、ずぶ濡れで膝まで水に漬かりながら、長区間歩いて宿舎へ。途中、マンホールの蓋が開き、濁流に飲み込まれないよう必死。翌日のテレビ報道で、我々が側を通ったマンホールに吸い込まれた行方不明者多数あったことを知る。また、当時先輩から聞かされた雨絡みの逸話では、リレーのバトンが水浸しのトラックに落ち、折からの風で隣のコースへ流されて失格となった事件等もある。

『旧三商大戦』は大正13年の神戸商大戦から数えて、戦争での中断を除き、今年で67回目の伝統ある対校戦である。1998年の70回記念試合は、多くのOBの参加も得て、盛大に実施かつ祝いたいものである。

② 四大学戦(東京外語大学、成蹊大学、学習院大学、一橋大学)

この対校戦の歴史も古く、大正13年(1924年11/22)に東京商大・石神井グラウンド(大正12年の関東大震災後、神田一つ橋から国立に移転するまでの間、石神井に仮校舎)で行われた東京外語大VS東京商大予科の試合が発祥。その後の記録では昭和12年に第5回の東京外語大／東京商大専門部の対校戦が実施さ

れている。戦後は昭和31年(5/27)に東京外語大／一橋大対校戦があり、昭和43年まで続き、翌昭和44年に学習院大も入れた三大学戦となった。

学習院大との対校戦は記録では昭和33年に第2回が実施されている。(第1回は前年と思われる)。学習院大戦は昭和43年まで続き、上記の通り、昭和44(4/27)に東京外語大、学習院大、一橋大の三大学戦となった訳である。

成蹊大との関係も古く、昭和2年(1927年11/13)に東京商大専門部が対校戦を開始している。戦後は昭和43(11/30)に復活第1回が再開される予定であったが、時期外れの集中豪雨のため中止となった。その後、昭和47年(4/23)に実現し、以降平成元年まで続き、平成2年から三大学戦に合流し、四大学戦となった。

以上の歴史を経て誕生した四大学戦は平成2年(1990年4/14)に武蔵野市宮陸上競技場で開催された。試合結果は成蹊大111点、一橋大92点、学習院大89点、東京外語大68点であった。記録面では400mで、一橋の長谷川選手と学習院の小林選手が共に48秒台をマークしたのが光っている。

平成元年の三大学戦からオープン実施の女子対校の部は、平成2年の四大学戦から正式対校戦になり、成績は学習院大14点、一橋大11点、外語大5点であった。(3点制。成蹊大は不参加。)

厳密な意味での四大学戦は今年で第6回目に過ぎないが、そのルーツは古く、前述の通り旧三商大戦のルーツと同じ大正13年に遡り、これまた伝統ある対校戦である。

以上を図式化すると次の通りである。

(大正13年)
東京外語大／東京商大予科
(
(昭和2年)

成蹊大／東京商大専門部

(昭和12年)

東京外語大／東京商大専門部

(昭和31年)

東京外語大／一橋大

(昭和32年)

学習院大／一橋大

(昭和44年)

三大学戦

(昭和47年)

(平成2年)

成蹊大／一橋大

四大学戦

なお、私が知っている印象に残った選手を挙げれば、短距離では学習院大の中西選手、中長距離では時期は違うが東京外語大の河西選手である。二人共、スパートの切れ味と走法の美しさが際立っていた。なお、河西選手は社会人となってからも東京海上陸上競技部のメンバーとして駅伝等で永く活躍し、昨年、海外勤務から帰国し最近トレーニングを再開し始めたと聞く。

③ 東大戦（東京大学、一橋大学）

昭和4年（1929年6／22）の東大経済学部と東京商大の定期戦が始まりである。戦前の開催記録としては昭和12年の第9回を含め、昭和17年まで実施されている。戦後は終戦翌年の昭和21年（10／21）に復活第1回の対校戦が実施された。以降、東大／一橋対校戦として毎年9月に開催されている。変則的に昭和39年のみ学習院大も含めて実施している。

戦前も含めれば今年で64回目の伝統の一戦である。対戦成績は東大が大半勝っている。私が在学した昭和40～43年は2勝2敗であったが、これは希なケースである。学生数では、この対校戦のルーツである東大経済学部と一橋大学全体が同じ程度であり、層の厚さ

の前に苦戦が続いている。

昭和40年代前半の印象に残った選手を挙げれば、古武士然とした風貌の800mの小林寛道選手（現在、母校東大の体育生理学の教授）、中距離でインターハイ上位実績の池田選手（学生運動で途中から見なくなったが、その後どうされているだろうか）、ジャンプ・短距離で強かった前田選手等がいた。

④ 名古屋大戦（名古屋大学、一橋大学）

歴史的に見ると東大戦開始の1年前に当たる昭和3年（1928年11／25）に名古屋高商VS東京商大戦が行われている。しかし、戦後の対戦は遅く、昭和46年（10／24）に開始された。戦前からの関係というよりも、当時の両校の主将同志が同じ高校の陸上仲間であったことから開始された対校戦である。シーズン最後の対校戦として原則毎年10月に開催されている。今年で戦後25回目である。対戦成績は名古屋大が優勢であり、例年好勝負ながら近年では一橋大は平成元年に2連勝して以降、勝利していない。

⑤ その他の対校戦

以上が現在実施中の対校戦であるが、大正末から昭和にかけては様々な対校戦を実施していた記録がある。例えば、大正14年開始の横浜高商戦、昭和2年開始の東京高校／東京商大予科、立教高校／東京商大予科など。特に昭和12年は意気盛んな時期か、実に九つもの対校戦をやっている。その内の幾つかを拾ってみると、水戸高商戦、高等農林戦、第4回成城高校戦、専修大学戦などがある。専修大学戦は関東インカレ1部の有力校と対戦しようと言うことで、当時専修大学教師であった故相馬勝夫OB（昭5年卒 後に専修大学学長）の橋渡しで実現したものである。昭和12年の東京高校戦が第11回と記録されていることから判るように、これらの対校戦は単発的なものではなく、昭和17年まで継続され

ていた。

私達の頃から始まったユニークな対校戦としては、沖縄の琉球大学との遠征試合がある。この発端は昭和41年に『旧三商大戦』5連覇、久し振りの『東大戦』勝利で、故吉見泰二OB（昭11卒 元昭和鉱業社長）等の尽力で昭和42年3月に、当時はまだ本土復帰前であった沖縄での合宿・試合が実現したものである。当時の思い出としては、柔道場で寝起きしたので南国とは言え朝晩は大変寒く、持参の全衣類を着込んでも間に合わず、街で寝袋を買う。ホッとしたのはいいが、良く見ると寝袋の内側に血痕らしきものが付着している。当時はベトナム戦争が激化しており、寝袋に戦死者をドライアイス詰して、沖縄に

空輸し、用済の寝袋がヤミで廉価販売されていたらしい。それを聞き、日中は必死で日光消毒し、夜は神妙な気分で寝袋に収まった次第である。

この沖縄遠征は昭和53年まで続いた後、途絶えていたが、最近では昭和63年に久し振りに『旧三商大戦』で優勝したので、翌平成元年3月に再開され、現在も継続実施されている。

2. 一橋大学陸上競技部の紹介

折角の機会であるので、一橋大学陸上競技部の紹介もさせて頂きたい。本文を目にした高校陸上競技選手が一橋陸上競技部に興味を持ち、入部してくれれば、関係者として望外の喜びである。

① 学内記録

種 目	記 録	時期	試合名	選手名	現 在
100	10.6	昭52	三 商 大 戦	陶 山 寿一	東京海上
200	22.18	昭52	全 日 I C	陶 山 寿一	東京海上
400	48.12	平 3	関 東 I C	長谷川 聡	住友銀行
800	1.56.2	昭42	選 抜 選 手 権	遠藤 恒夫	東京海上
1500	3.58.3	昭57	学生対実業団	山下 誠一	丸 紅
5000	14.40.4	昭56	関 東 I C	松原 俊二	日本郵船
1万	30.50.8	昭43	学 連 記 録 会	遠藤 恒夫	東京海上
20K	1.04.40	昭42	箱 根 予 選	遠藤 恒夫	東京海上
マラソン	2.31.45	昭43	愛媛マラソン	遠藤 恒夫	東京海上
110H	15.3	平 4	三 商 大 戦	土田 克則	アッダーソンコンサルティング
400H	54.82	昭63	関 東 I C	徳田 直寛	日本興業銀行
3000SC	9.16.51	昭42	日 本 選 手 権	遠藤 恒夫	東京海上
10000W	48.06.04	平 7	関 東 I C	伊坪 道広	一橋大学3年生
400R	42.55	昭53	関 東 I C	桜井、鈴木、川幡、陶山	退部、キリンビール、東京海上、〃
800R	1.29.3	昭53	三 商 大 戦	鈴木、川幡、堀田、陶山	キリンビール、東京海上、興銀、東京海上
1600R	3.15.99	平 1	関 東 I C	設楽、岡、中村、長谷川	日本生命、三菱商事、三菱地所、住銀
走 高	1.95	昭49	関 東 I C	谷口 優	住友電気工業
走 幅	7.20	昭58	ク ラ ス 別	内田 哲也	東京海上
三 段	14.91	昭58	静 岡 選 手 権	内田 哲也	東京海上
棒 高	4.40	昭41	十 大 学 戦	青木 俊樹	日本興業銀行
	4.40	平 6	関 東 I C	宗像 秀雄	三菱電機
砲 丸	13.10	平 1	三 大 学 戦	松本 勝男	海外経済協力基金
円 盤	41.46	平 1	関 東 I C	松本 勝男	海外経済協力基金
や り	66.00	昭41	選 抜 選 手 権	松本 正義	住友電気工業
ハンマ	46.02	平 5	関 東 I C	吉田 賢一	三和銀行
十 種	5925	昭58	関 東 I C	深沢 豊	東京海上

女子部門は発足後間がないので、参考になる記録は少ないが、下記の好記録がある。

女子800 2.08.65

平4 関東IC 伊丹 千絵 (凸版印刷)

② OB倶楽部組織

冒頭で記載の通り、一橋大学陸上競技部は発足後70年以上の歴史があるので、OBもかなりの数に上る。OB組織である一橋陸上競技倶楽部は、会員数425名、物故会員数118名である。現在、現役の学生部員数は、44名である。歴代平均すると1学年当たり7～8名の部員数であり、まとまりが良く、OB組織の結束も強い。

比較的有名な選手としては、戦前では水上達三選手(昭3卒 元三井物産社長)が挙げられる。学生当時800mで日本新記録を出し「隼の達」の異名をとった名ランナーとして知られている。

我々の世代の長距離陣のスーパースターとしては、遠藤恒夫選手(昭43卒 東京海上)がいる。前表で記載の通り、現在でも5種目の学内記録保持者である。因みに1500mは3分59秒4、5000mは14分55秒4であり、共に学内2位の記録で、昭和50年代後半に破られるまでは、実に7種目の学内記録保持者であった。(400mハードルの56秒9も入れると8種目)。学生時代から青森東京間駅伝の東京都代表選手として区間記録を連発して活躍していた。優秀な学生競技者に贈られる「学連賞」も受賞している。社会人になってからも3000m障害の全日本クラスの選手として活躍し、特に昭和44年の埼玉県上尾競技場での日本選手権では、時の日本記録保持者の猿渡選手(新日鉄)とトップ争いを演じ、9分の壁を突破する8分56秒6の好記録で堂々の4位入賞を果している。その年の広島の大大会では自己記録を8分54秒8(年度日本8傑)まで伸ばした。1500mの自己記録も3分54秒6をマークしている。しかし残念ながら翌年

5月初旬のスポニチ全日本選抜大会(国立競技場)での3000m障害レースの1周目の水濤で、着地時に左足疲労骨折し、本格的な選手活動を終えざるを得なかった。因みにその時の優勝は当時の世界記録保持者のクーハ(フィンランド)8分43秒2であった。世界的な選手とレースをする位に、油の乗っていた時期だけに、惜しまれる怪我であった。遠藤選手はその後は市民ランナーとして陸上を楽しみ、近年はホノルルマラソンにも出場されていると聞く。なお、遠藤選手は大学から陸上を始め、高校時代はバスケットボールをやっていた。一橋大陸上競技部は陸上未経験者がほとんどである。

有名な陸上競技者であった人の二世選手としては、戦前のオリンピック・金メダリストの故田島直人の子息の田島泰次選手(昭50卒 日本興業銀行)がいる。父親同様、三段跳の選手として活躍し、関東IC(二部校)の大会記録を更新した。その時の記録14m73は現在学内2位の記録である。

女子部員では、陸上競技以外ではあるが、時々マスコミに登場する大田弘子選手(昭51卒 大阪大学経済学部客員助教授)等がいる。因みに、大田選手は200m27秒の女子スプリンターであった。

一橋陸上競技倶楽部OB組織を語る上では、沖縄遠征の箇所で紹介した故吉見泰二氏存在を忘れる訳にはいかない。その功績は数知れない。一例として、戦後の地方出身選手の学生生活支援の為に、国立市の大学の近くに土地と建物を提供され、昭和50年代まで常時6名前後の部員が寝食を共にしていた。

「クラブハウス」と呼ばれ、合宿やコンパの場所としても、歴代の部員にとっては青春時代の懐かしい思い出の場所である。四半世紀以上に亘り、部員の食事のお世話をして下さった近藤節さんも十数年前に他界され、今はもうおられない。

現在、一橋陸上競技倶楽部OB組織は昭和

35年卒の佃義範氏（ツクダ社長）のご好意で、事務局が運営されている。

一橋大学陸上競技部にとって欠くべからざる人として、永らく部長をして下さった都留重人先生（元一橋大学学長）がおられる。ご自身、旧制中学時代、陸上の長距離ランナーとして活躍され、当時の全国大会で上位入賞されている。試合の応援はもとより、毎年冬（12月第1土曜日と記憶している）には、学生とOBをご自宅に招待下さり、趣向を凝らした楽しい一日を過ごさせて頂いた。「寿司屋の特別出張にぎり」や当時はまだ知られていなかった「元祖ゲートボール」は印象深かった。また、我々の頃には毎年夏、中軽井沢の別荘を長期間提供下さり、お陰で長距離陣を中心に涼しい浅間山麓や中仙道を走り込むことが出来た。（時々、やはり軽井沢にあった吉見先輩の別荘にも邪魔し、ご家族と食事やゲームを楽しませて頂いた次第である。）その成果は軽井沢合宿開始2年目に表れ、箱根駅伝予選会であと1校抜けは出場権獲得というところまで行った。

また、先生は学生の意欲向上策として、ユニークな「都留杯」なるものを昭和40年に創設され、陸上競技部長をお止めになった後も、今日まで続けて下さっている。競技記録の優秀な選手に授与される杯であり、「都留杯」は大正末の日本記録を破ったものに授与される。その記録が破られた時は、以降、昭和10年の日本記録が適用される。それも突破した時は昭和16年の日本記録が適用される仕組みになっている。因みに、大正末の記録では200m（22秒0）、走幅跳び（7m24）の2種目が残っている。昭和10年の記録は破ったが、昭和16年の記録が突破されてない種目は、400m（47秒8）、5000m（14分30秒0）、1万m（30分25秒0）、1600mリレー（3分14秒6）の4種目。昭和16年の記録を突破した種目は棒高跳（昭和16年当時の日本記録＝4m35）の1種目。残りの種目はいずれも昭和10年の時の日本記録が破られていな

い。なお、「都留杯」の他に『準都留杯』というものもあり、これは一橋大学の学内新記録を出した選手に授与される。この記事を読んだ高校選手が、一橋大学の学内記録の突破と『都留杯』の獲得にチャレンジしてくれば幸甚である。

都留先生が陸上競技部長時代のOB仲間、先生ご夫妻をお迎えして「都留先生を囲む会」を毎年開催している。「都留杯」はその席上で学生選手に授与される習わしになっている。

名前を挙げさせて頂いた方々以外にも、一橋大学陸上競技部およびOB倶楽部にとって、記すべき功労者はまだまだ尽きないが、紙面の都合上、略させて頂く。

最後になりましたが、本記事を書くに際し、資料のご提供や聴取で、ご協力頂いた尾本大先輩（全国高商大会の箇所でご紹介）、一橋陸上競技倶楽部事務局の渡辺女史に心から感謝申し上げます。なお、本文中、事実と異なる部分が一部あるかも知れませんが、それは執筆者の私の了解違いによるものであり、是非ご指摘を願うと共に、また機会がありましたら訂正記事を書かせて頂きたいと思えます。

本執筆の機会を与えて下さった大田重男氏に御礼申し上げますと共に、当方の時間不足から十分な調査が出来ず、まとまりの無い内容になりました点、読者の皆様にはご容赦願います。（完）

（追記）なお、私事で恐縮ですが、平成8年2月18日の第30回青梅マラソン記念大会（30Km）に抽選が当たり、大変喜んでいました。読者の中にも出場される方がおられるかと思いますが、残り数ヶ月、ご健勝と当日のご健闘をお祈りし、筆を置きます。

後藤 哲也（一橋大学陸上競技部OB 昭和44年卒 現 東京海上陸上競技部OB）

制度についての筆者の知識不足が原因です。
例えば、一概に東京商大チームと言っても学部（大学）チームなのか、予科（旧制高等学校に相当）チームなのか、専門部（高等商業学校）チームなのか、或はその三つの合同チームなのか、4区分がありますが、その点の理解が不十分でした。お詫びして、下記の通り訂正させていただきます。

P. 19 右欄 下から4行目

昭和2年～4年→5年

P. 21 右欄 上から12行目

神戸商大→神戸高商

P. 22 右欄 上から12行目

東京商大専門部→東京商大予科

P. 23 左欄 上から1行目

東京商大専門部→東京商大予科

P. 23 右欄 上から12行目

東京商大戦→東京商大（専門部）戦

P. 23 右欄 下から12行目

立教高校/東京商大予科→立教大学/東京商大

P. 23 右欄 下から9行目

水戸高商戦→水戸高校戦

P. 25 右欄 下から9行目

土地と建物を→建物を

2. 補追部分①

本記事を目にされた方々から、一橋大学陸上競技部関係者が我国陸上界に残した功績についても、一言触れておいた方が良いのでは…との、我々が知らない貴重な情報を頂戴しましたので、訂正記事ではありませんが、この場をお借りして記させていただきます。2点あります。

1点目は日本学生陸上競技連盟（いわゆる学連）の創設に関してであります。学連の創設では、一橋大学陸上競技部の後藤文雄氏（昭和6年）や後にスポーツ評論家として一家をなした川本信正氏（昭和6年）が中心的役割を果たしております。

特別寄稿記事への訂正・補追

後藤 哲也

1. 訂正部分

No.397（1995.11.1発行）P. 19「埋もれてる大会⑩」『一橋大学の対校戦』の記事中に下記の誤りがありましたので、本紙面をお借りして訂正させていただきます。大半が旧制学校

2点目は日本陸上競技連盟（いわゆる陸連）の財務内容改善に関してであります。従来（東京オリンピック以前）は、陸連の会計帳簿は金銭の出入り状況のみを記した「金銭出納帳方式」でしたが、これでは債権・債務も含めた資産状況が明確に把握されておらず、陸連の財務内容はかなり問題がありました。そこで、東京オリンピック直前に陸連からの要請で、一橋大学陸上競技部OBの尾本信平氏（昭和8年）が中心となり、まず会計帳簿を企業会計と同じく「貸借対照表方式」に変更し、負債状況も含め、資産内容の明瞭化に取組みました。

また、資金作りの一環としての電話公債の購入や、雨天時の競技会入場料の減少対策として企業入場券の前売り販売等、大いに知恵を絞った結果、大赤字であった陸連の台所事情は、その後の歴代関係者の努力で大巾黒字に転換した経緯にあります。今や陸連は体協の中でも有数の黒字団体になるまでに至っております。陸連の財務内容の基盤作りを始め、その改善の過程で、歴代、一橋陸上関係者が果たした役割は大きかったと言えますでしょう。

3. 補追部分②

また、一橋陸上競技倶楽部の誇り得る点として、これまた、2点を参考までに記しておきます。

1点目は、倶楽部基金についてです。これは、記事の本文中で触れましたように、地方出身選手の宿泊施設として、戦後、OB倶楽部が国立市に購入しました土地を、鋭意検討の結果、昭和40年代後半に売却し、その資金で金融債権類を購入。その基金の定期利息で倶楽部を運営している点です。

そのお陰で、OBから現役への資金援助も、他大学に較べ豊富であり、遠征費用や合宿費用の面でも学生は助かっています。

当時の倶楽部関係者の決断の確かさであろ

うと思います。

2点目は、有為な人材を世に多数輩出して来た点です。例えば、日本の2大商社の元社長は一橋大学陸上競技部OBです。因みに氏名を記せば、三井物産の故水上達三氏（昭和3年卒）と三菱商事の田部文一郎氏（昭和5年卒）です。その他、実業界を中心に歴代数多くのOBが活躍しております。

4. 読者へのお礼

記事をお読みになられた愛好会々員の方々から、お電話を頂戴したりし、私の拙い文が何がしかのお役に立った向きもあり、太田会員から依頼を受けた際にお断りしないで執筆した甲斐があったと感じております。

一例を挙げさせて頂ければ、大阪の田崎俊郎会員（会員No.2）から早速お電話がありました。田崎様は過去の日本の長距離選手の各種データを整理されており、その中で唯一、一橋の遠藤選手の生年月日と出身高校の欄が永年ブランクでしたが、今回の記事をご覧になったの照会でした。

〔お役に立ち何よりでした。また、田崎様は一橋最大の対校戦の旧三商大戦の相手校である神戸大学のOBで（陸上部には所属されていませんでしたが）、私と同世代でもあり、対校戦5000mで遠藤選手が好敵手でした神戸大学の依田選手名前も登場しました。

どこでどう言う御縁があるか……、面白いものだと感じた次第です。〕

以上、補足のつもりが長くなってしまいましたが、私の記事が発端になり、数多くの大学の陸上部の対校戦の記事が、今後、本誌に続々と登場することを心から期待し、筆を置かせて頂きます。大変ご無礼を致しました。

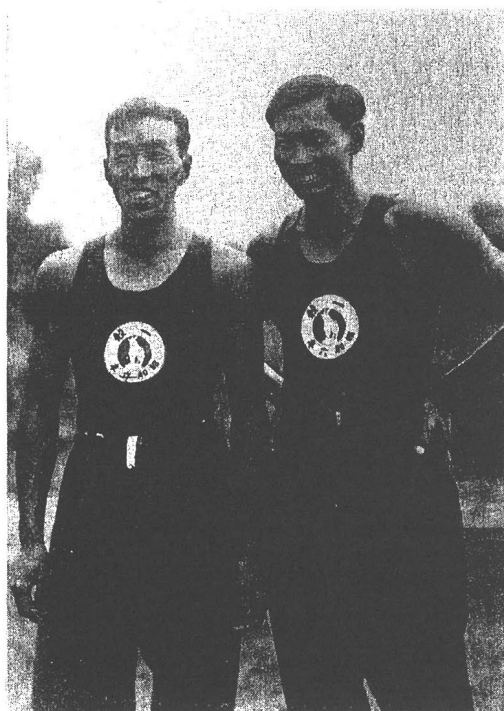
（1995年12月記）

「戦前日本歴代百傑集」
にみる本学関係者

戦前日本歴代百傑集

～戦前の陸上競技記録の集大成～

Japanese All Time
Top 100 Performers Lists
as of 1945



編集

加藤 四郎

曾根 栄

千田 辰己

Comiled by

Shirō Katō

Sakae Sone

Tatsumi Senda

(表紙) 1931年(昭和6年)10月27日の
右, 織田幹雄(三段跳15 m 58)と南部忠平(走幅跳7 m 98)

「戦前日本歴代百傑集」にみる本学関係者

「戦前日本歴代百傑集」は、1993年6月1日に陸上競技愛好家によって出版されましたが、その中に本学の先輩の方々が多数掲載されておりますので、ここに取り纏めて報告させていただきます。

なお、800 m につきまして、水上達三先輩の記録が掲載漏れのため、編集者の判断にて追加いたしました。

(種目)	(順位)	(記 録)	(氏 名)	(日 時)	(大会名)	(場 所)
800m	79	2' 02" 0	水 上 達 三	大15.7.15	全日IC	神 宮
110mH	105	16" 2	三 隅 義 信	昭15.7.14	三商大戦	国 立
(同記録が8名)						
400mH	64	58" 1	黒 住 忠 行	昭14.7.16	全国高商	甲子園
走高跳	19	1m90	橋 川 雄 一	昭10.5.25	日本IC	甲子園
(同記録が16名)						
	53	1m85	木 原 正 義	昭12.7.11	対神商大	甲子園
(同記録が38名)						
三段跳	107	14m12	木 原 正 義	昭14.6. 3	関東IC	神 宮
(同記録が2名)						
槍 投	78	54m33	外 川 武	昭 9.9.30	関東IC	神 宮

部史第一部補録

部 史 第 一 部 補 録

平成9年5月に発刊しました「一橋大学陸上競技部史／大正12～昭和33年」において、校正漏れや原文の記録・日付ミス等がありましたので、下記の通り訂正・補充させて頂きます。なお、本項は岩田正雄先輩（昭和23年卒）に全面的にご協力を頂きました。

		記		
(頁)	(行数)	(誤)	(正)	
24	下から 1	<u>勝賞旗</u>	<u>優勝旗</u>	
30	上 5	<u>新枝</u>	<u>新坂</u>	
31	上 2	<u>新枝</u>	<u>新坂</u>	
31	上 12	<u>千</u> で之を抜き	<u>半ば</u> で之を抜き	
38	下 5	58秒	58秒 <u>9</u>	
45	下 13	<u>桝井</u>	<u>柳井</u>	
49	下 6	一週間とて	一週間 <u>前</u> とて	
50	上 10	堅くなった <u>が</u>	堅くなった <u>か</u>	
77	下 1	初の人と	初の人 <u>を</u> と	
78	下 7/6	済んだもの、	済んだもの <u>の、</u>	
88	上 5	敗送戦	敗走戦	
102	上 1/4	<u>侵る</u> ／ <u>侵り</u> 込み	<u>浸る</u> ／ <u>浸り</u> 込み	
109	上 本文 6	<u>成衣</u>	<u>戎衣</u>	
112	上 本文 10	第 <u>3</u> 位	第 <u>5</u> 位	
115	上 1	陸上競技班	陸上戦技班	
123	下 14	<u>100m</u> ハードル	<u>110m</u> ハードル	
128	上 3	<u>6</u> 月	<u>10</u> 月	
	下 3	<u>木著氏</u>	<u>日暮氏</u>	
143	(各行頭部分の印刷欠落)		1行目 <u>の年輪の</u>	
			2行目 <u>いがする。</u>	
			3行目 <u>どうか</u>	
			4行目 <u>て頂くことを</u>	
175	下 9	<u>敗る</u>	<u>破る</u>	
315	上 7	及川 (<u>商</u>)	及川 (<u>東</u>)	
326	下 11	200m <u>25"</u> 5	<u>25"2</u>	
327	上 9	(岩田・円盤投記録)	<u>26m42</u>	

以 上

編 集 後 記

編集後記

部史第2部作成の参考にする資料をお借りするために都留先生のお宅を訪問した折、その昔先生のお宅で我々学生に分不相応な寿司を握ってくれた“ヤースン”こと矢島さんが、今もご健在で寿司店を経営されていると聞いて、先生のお宅からの帰途教えて頂いた道順を頼りに南青山の“つかさ寿司”を尋ねてみました。

かつての若々しい寿司職人も、40年の時を経て貫禄充分な親方に変じていましたが、欲得を離れて学生に美味しいものを食べさせようとしている先生に“意気を感じた”と笑う生粋の江戸っ子の心意気は昔とちっとも変わらず、都留先生が何を大切にしておられるかを実感したひとときでした。

一橋大学陸上競技部史第2部は、この都留先生が部長に就任された昭和34年度からスタートしています。そのいきさつは、第1部の阿部編集委員長が編集後記の中で詳細に述べられておりますので皆様ご承知の通りです。そして、どこまでとするかは第1部でも大きな問題でしたが、陸上競技部長交代の時期を区切りとした1部の方針を踏襲し、第2部は塩野谷先生が部長として在任された平成元年度までとすることにしました。

第3部にまわされる平成2年度以降の方々にはご不満もおありかと存じますが、事情ご賢察の上よろしくご理解下さるようお願い致します。

第1部は、散逸している資料を収録・整理することと、長い歴史を積み重ねた膨大な資料をどう編集するかで難行苦行されましたが、第2部はそのノウハウと第1部で中心となって活躍した若手の人材を引き継がせて頂いたお陰で極めて順調に編集作業が進み、編集委員会発足時にお約束した1年間という短期間で完成させることができました。

特筆すべきは、水野委員(42年卒)、中村委員(54年卒)、西委員(57年卒)の3名が、年齢的に最も多忙な年代であるにも拘らず、第1部に引き続き第2部

も編集委員の中心となって活躍して頂いたことです。本当にご苦労様でした。
この3名が中心となって選抜した他の委員も陸上競技部に対する情熱と責任感
に満ちており、水野委員の采配の下に与えられたテーマを月1回の編集会議ま
でに全員がキッチリこなしてくるさまは、さすが一橋大学の陸上競技倶楽部だ
けのことはあると感嘆すると共に、お陰様で重責を全う出来たお飾りの編集委
員長として心から謝意を表します。また、ご多忙中快く執筆に応じて頂いた先
生方や大勢の倶楽部員の方々にも感謝申し上げる次第です。

この第2部が、これから何年先になるかわかりませんが将来発行されるであ
ろう第3部への橋渡しとなれば幸甚です。

この部史第2部が皆様のお手元に届くころには、編集部員一同がヤーさんの
店に集まり、盛大な“打ち上げ会”を開いていることでしょう。

(佐野嘉男 記)

平成11年4月

編集委員長	佐野嘉男（昭和35年卒）
委員	水野晴夫（昭和42年卒）
委員	寺田恭典（昭和53年卒）
委員	中村龍太郎（昭和54年卒）
委員	西康宏（昭和57年卒）
委員	日渡淳（昭和62年卒）
委員	山崎晋（平成5年卒）
委員	宗像秀雄（平成7年卒）

一橋大学陸上競技部史（自昭和34年 至平成元年）

発 行 一橋陸上競技倶楽部

〒111-0023 東京都台東区橋場1-36-10

（㈱ツクダ社長室内）

電話 03-3874-5138

印 刷 有限会社 橋本印刷

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-1-19

電話 03-3358-1081

発行日 平成11年5月28日

